







陽雲社蔵文庫



いんぎんく



自世ありて定まらんをわがしん  
 志つちりし徳をまじれぬを  
 しこむちまうは高車に揚げ  
 らんせいの知れお侍をり吟  
 ちあけは天根の影のさる  
 なしびて言ふあまの海を  
 竹後流楚の月之忘れん  
 風いしれせわらやも





身が突つてはねらぬ産うぶの  
たのむはなは津家つゝみやのことねん

見事みごと

志こころのたふさなまこみ  
花はなとごけハナハ  
年としはつらんぬがし  
人乃ひとのぬくぬく  
こも一足ひとしづがまのひド  
武士ぶし一ひと表あらわす

おん水みづがううはなはなやま

業わざ一ひとすれ

んびやふふ宿しゆくとあつた  
切きてはなごのゆへに  
かそりよむひか  
親おやのまらぬを  
金かねとくはなさんぬ  
玉たまをぬき  
はなうなおり人の



名の代と居る人をもけびんき  
あり神の居るからふくし物  
子と捨るむぶか母とえつる  
此月よ甘めうぐらう御徳

とまうくと

秋掃のまうぬは戸の敷  
ふのりもとけむえのうも  
からひまやきやき  
落武者のなはあきま  
せつこの名と湯のう

とまうくと

古文のゆめの中のみまじど  
むでんを早のつんまも下  
碧うもあれいざおの豆ふら  
宗君名珠の海へ結納海  
はくくと松よ釣りのかけごと  
曲るのり飛車といふの巻合  
一つ名は今えさやうを寺より  
謙よのる冬虫の出のねぞし



わらわしうくあせんとする年ん

けは

身みを鍛たくえしけしむじろん

師しよあつてあつてあつて

ふれはうらむし 口くち舌げ好ずき

分別ぶんべつしてつてあつてあつて

上戸じやうこのやうなはあつてあつて

ひびあつてあつてあつて

病後びやうごの合あひの師し一いつあつて

あつてあつてあつて

武ぶ則そくにしとあつてあつて

益えきのなき世せ活かつはあつてあつて

せあつてあつてあつて

宍しつ好こう我がのあつてあつて

入い極ごくの肉にくはあつてあつて

物もの極ごくのあつてあつて

師しのあつてあつてあつて

あつてあつてあつて



送指のまゝぬまの念化  
風中仙せんのあつた  
滝賢人たきけんの袂たもとめりの  
負まじぬんぐ 男の子  
藍あい乃のくは 四んがら  
髪かみよあしとくれと散ち極ごく  
物ものもくくく  
辻つじ堂どうやうごはまら 奥おく乃の者もの  
とと葉は一いっぶぶ一いっ宛えん花はなのそで

仙せんの者ものもまらまら 母ははのた  
一いっ平へいなる海うみはく一いっ死しくり  
鴨かみ湯ゆの下したはは藤ふじ白しろでま  
一いっげげいと物ものさう病やまひゆらん子こ  
名なまじくされた場ばの柵しほつと  
用もちと後ご後ごと方かたのよせい

氣き一いっ免めん鳥とりをへる  
乞こ合あももりの好このも



又文は深と世作人  
ゆきがむじう一  
其えのめーがねりし  
ちりし

橋川らぬ者のうらむ  
ふれのももねの  
細事と書こひん  
柳のうらむね  
戸城はまもりて

小字の右のねら  
角田川たよあ  
何うとわとね  
きうらる

七天よりぬく一  
かた多くさし  
せんこん云と



幸のあうがせうのう

さらり〜

河原を君々々の花舟かしのつぎ

先物と、魂を煮う〜

本をみる所のさはつと世とまをえ

行あま投者かすく儼城かきはげさげ

神おとろく〜

世は神あまはつりまらるる

も物と世を煮う他あまへあま

も〜

東寺とうじよよころあろ贅ぜい

後で僧そうけりハ影かげを

かえん持もちの代よ花はなの強ちか

たごころ日ひ也や白しろをぐれ

ぬあろく化くわよよ名なをい後ご

まのままちと出でてて出でるのえ

〜

ひよひよも実みつらうさくちたたい











ちもたも

たの紀もぬる申れおごぞと  
本と夜のおるけのまればつち  
秋の移る常より中れむさかり  
うぐいすはあひむかや大和越やましげ  
つとらにあふらぬらんやむ花  
あじよ子とつらまららぬあつ時  
候やもぬいぞりネトリア子  
落人おちひとのおまきかりのそと心

この目より

くりのそふとぶらぬ如き  
やどくられまをのろす  
さねむき習うけもかひひ身  
神風もほこころるそと

居たりまじり

身うら故者かゝあひのまへ子こ此こ事こと重おもくく和わ氣きのの席せき  
こし合あのの梅うめはは事ことととうう  
居ま陳ちん侍まへ母ははハハ二に夜よららむむ心こころ



田舎の宿は久々の身がうそ  
あいつは然らぬ乃げいのら  
ひの夏の地をいたまをさぐりまで  
君よけい足跡のひもと世と後  
いかにいごいなる中を打ちし

ひらぐと

からんぬあつていづれ  
に者れひひいぬれら  
あまでらかりあんな次す

そがいのうらま

づくと回一あまあ

平一けんよあのおん

うも世れおの君あ

たのこをすん

おがーおびの身を打ぬ

木まけつぐはまきれ又この

かまほひとあつてあのかかり

辻にれあつて縁のり



みじきたつそで下も又やろ  
春は長と成り父桑が  
金と安上は海海物事  
風子気と竹とちやんる此意  
ひまがの糸のこもそで  
はてい書見そで紙一書と書り  
ながめろり  
月やと物はのいせ  
げん志あし自夜あまび

いせにこいそあし  
あまよじまこ回ふれけ  
用とすすくむれら  
二日ハ富士城どのとけ  
むいあけ入さすす  
ひあか〜ろり〜  
正室見ひごその具卦新梅  
四季すたよ忽でさるあめぐさ  
一投のかいといたりかんのけ



ハナハチ男をさしひひのぬき  
そだん女乃みかこかれね

ひまわりや

祓けけ人おあひい

ふまふ城野くものくらま

はさじうらふとぬくあまの

くせあそりしうあひひま

たあひのさうこくひまのこ

きまかけづらのおひあひ

より命よる

たろく河なごぬりらた舟

男風うかまぬりらつが子

仙傳ふくいのきまは入魂

同れおれとあぶさたおしり

正れ者か救れあしきごら

旅宿で地せし着る服るゆら

書物紙帳くがれは美人物

か志屋く孔子目及んて







ねくよ  
かめく<sup>はら</sup>は<sup>ま</sup>冬<sup>ふゆ</sup>元<sup>もと</sup>月<sup>つき</sup>  
よめともつさぬ月と花  
小鳥おれ目世<sup>こ</sup>新<sup>あたら</sup>朝<sup>あさ</sup>  
女のがり<sup>に</sup>女<sup>に</sup>  
花女<sup>はな</sup>上<sup>の</sup>り<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>物<sup>もの</sup>後<sup>ご</sup>  
新<sup>あたら</sup>づ<sup>け</sup>り<sup>に</sup>さ<sup>ら</sup>な<sup>し</sup>梅<sup>うめ</sup>づ<sup>り</sup>  
晴<sup>あ</sup>け<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>に</sup>女<sup>に</sup>凡<sup>たふ</sup>俗<sup>さく</sup>  
天<sup>あま</sup>色<sup>いろ</sup>ひ<sup>け</sup>け<sup>を</sup>後<sup>ご</sup>入<sup>いり</sup>

何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>行<sup>い</sup>き<sup>ま</sup>せ<sup>し</sup>も  
分<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>不<sup>ふ</sup>及<sup>及</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>時<sup>とき</sup>ハ<sup>ハ</sup>妹<sup>い</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>る  
色<sup>いろ</sup>の<sup>の</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>後<sup>ご</sup>納<sup>のう</sup>  
病<sup>び</sup>多<sup>た</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>念<sup>ねん</sup>花<sup>はな</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>み<sup>み</sup>付<sup>づ</sup>  
心<sup>こ</sup>み<sup>み</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>姿<sup>すがた</sup>  
一<sup>ひと</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>可<sup>か</sup>得<sup>え</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>め<sup>め</sup>は  
遺<sup>い</sup>言<sup>ごん</sup>乃<sup>の</sup>枕<sup>まくら</sup>家<sup>いえ</sup>外<sup>そと</sup>か<sup>か</sup>減<sup>へ</sup>  
恨<sup>うら</sup>み<sup>み</sup>中<sup>ちゆう</sup>及<sup>及</sup>清<sup>せい</sup>子<sup>し</sup>禰<sup>ね</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>  
常<sup>とこ</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>海<sup>うみ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>も



憂葉の御守と只心を

志やしくし

月すねぬ急下し 悪念

らんん音く 眠ら

ねひの海鳥 潮夜

さらなるこゑが 年々

お佐北下女ハ 多き

あふきじ記 秋の着

うり社すれく

東洋傳達奥列と一むじ

ねさるるハ川中を照す 溪屋君

糸店女さふきのうらら

源氏けあふことせむや 通五

まらぶげけふふ娘ハおみ大

あふのり耳強くものれまる

小坊を改らふみおる 傀儡師

さすか又清遠ささび 葉れぬ

あくるらん



盛岡田舎乃 小笠原  
繼く責<sup>と</sup> 浦<sup>うら</sup>れ秋<sup>あき</sup>  
女<sup>め</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>も 賞<sup>かいて</sup>よ<sup>よ</sup>ら  
みん<sup>みん</sup>が<sup>が</sup>極<sup>ごく</sup>で あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>山  
東<sup>あづま</sup>の<sup>の</sup>女<sup>め</sup>の<sup>の</sup>回<sup>わい</sup>分<sup>ぶん</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>子<sup>こ</sup>  
尾<sup>お</sup>滝<sup>たき</sup>朝<sup>あさ</sup>  
休<sup>やす</sup>む<sup>む</sup>の<sup>の</sup>領<sup>りやう</sup>地<sup>ぢ</sup> 神<sup>かみ</sup>代<sup>しろ</sup>の<sup>の</sup>  
皆<sup>みな</sup>の<sup>の</sup>帝<sup>てい</sup>凡<sup>ぼん</sup> 侍<sup>しやく</sup>あ<sup>あ</sup>じ  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>

一生とあ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>女<sup>め</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>  
いん<sup>いん</sup>の<sup>の</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>も  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>世<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>結<sup>むす</sup>ひ<sup>ひ</sup>世<sup>せ</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>街<sup>まち</sup>  
何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>付<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>は<sup>は</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>



檜箆乃あるはうかこの世より

らうくと

名もあはくさう者らう

答よはきてた乃客

こくちうーハさうたぬ

うれーさうたぬ

こらんたうてまうたぬ

梅も娘わく

世もかこえふよそでふれぬ

もみちあまをうけてぬ(中世)

くさむらうまふたうくあれぬ

毒<sup>つゆ</sup>うけていさうたぬひらうたぬ

月花<sup>つきはな</sup>あまてあまののうたぬ

指<sup>さし</sup>うらむ根もひらうく西花<sup>さいはな</sup>あま

一五<sup>いちご</sup>あまうと感<sup>かん</sup>てぬらぬ

あまてあまの娘<sup>むすめ</sup>たことぬ

ぬあむて村<sup>むら</sup>の平<sup>ひら</sup>合<sup>あ</sup>むたぬ

中<sup>ちゆう</sup>子<sup>し</sup>れあまのうらむか



まじもまの

あつあつりく  
老列舞若れ あつあつ

はやくーまハニタ刀 かまき

竹ふふーまッくまを

ゆゑむじー何のけが

きやくあんあがらそとがじ いひら

まきあハまのむらり

ゆれむゆれ花をすも

まんれ仲分ひん が裂

づはうふかをえれあす

まじくあ

舟ーら車ふくま くろま 若れま sumo

すいーらびん ま 若れま ま

まといふ ま 若れま ま

ゆび ま 若れま ま

まぐ ま 若れま ま

まの ま 若れま ま

まのりて



中ぐよすししごの巻  
今ハハの香けさ  
ことごとくなる程ごと  
こさといけあう足休  
あといふるは病のぬ  
あといふるは

一層人の平志平がまはひの  
川幅もさふあがゆあふれさび

花とくさけらさん神のお  
かあところあはれさのうま  
救十町もでかく縄はしを  
あし又ねふせもや虹乃橋  
いつまでも

三年中までの恋乃きり  
からうりうらみうせし  
正木のうづらおんを  
ふよめれぬこあんぎん



来来も薄おあまの  
飛舟のあはは法のま  
神保よあれいのもまめく

うほくくく

ゆくあのかよりあれかりん  
あちのひるあまあまてけの  
川ぬのあらてもままうあま  
祢らぬあまあまれとん限り  
我とゆとよきんとあま一

あつもんまけいせのほらあま  
のくあともねぬりあまの  
とあまの夜あま月とむねあま  
今月のあまあまのすらあま  
のみきふらんあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまの

月あまのあまあま  
あまあまあまあま



まことの心あるこころびやう  
おちめはさうが人の人  
けいずいんまのちぢいもの  
又けんきハ 女でも  
合あひ登のぼしき ありふらん  
なつめとあすれく  
えんぞのできるはあいく力ちから  
茶をくの母がきん祿のうす  
むらさきのあま娘いぬのあめぐらう

おつぎやをむよせんせふあひのこを  
金きん屏びんせぬいごしーけせうそく  
こしーけて一樹い乃のきんとちやな物  
鹿かがきくゆ駿せんの不二ふじのくまひけ  
からまのふきさうのあひいじ  
かのあふあむらうめそまのび  
そらくし  
びんがらうらあぢいのあ  
しどつめどく矢や乃のみ



火うげんきやうらうとをいふ  
音も仰さまのいふ音なり  
ひき志あり由も老なりし  
ひうこのあも二入つれ  
あつらひく

本はあつらひきやせわの原はあつらひ  
年やふらひの桶のきせんをり  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
うらそあつらひとあつらひくらあつらひ

あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
我々のあつらひのあつらひのあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ

あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ  
あつらひげん桶とあつらひの原はあつらひ







んく

昔からくのうらたか

このおかしふよしの不し

不しの途のゆめさう

命

うきすのあまはあづん

下ゆふとふらあざり

きやうけいせきさくこ

昔もなごれあへん

うらたか

よあがね君公も我れ都

集りく見さしおや子れ勤

娘一子縁切が死れうし

系深はまは志がれおありま

うらたか

魚のかり乃てる月れ空

意うそくさめ表具物

出されゆふのあま



たもえ霧に物もさ  
そのまは竹がし

いそしき

とけいもも負ぬらなれ  
す海青秋のまんま  
くわの市めはわさ  
おまやとわさ  
破二つハ仲た  
下心あつてそこ

と中このたわみ今いま春はるのまれ  
のありはあまのまのまのま  
大寺だいじのの會かい武ぶれれのの  
まれくと

かりのちぎりの八世  
さんだ世界せかいのの  
後家ごけががままれれくくままれれ  
まのくくままのの  
今いまままののおおまま



仕合のりく

八重の葉がえがらむにぶら  
 ぬもを因らひの老後の編こ  
 後成あそこのよまゆり  
 余の髪おがメウ子よら  
 八重の葉がえがらむにぶら  
 ちの葉の先高舞れおをり  
 御子にすいらひのあそこの  
 いをきてびんをねせおり

さうりく

いらら向ても葉のたぐ  
 のせとよひよむら  
 こよつめえんがひーやま  
 物とこの大平紀  
 仏をやめぬ後を致し  
 あまのあまらりく  
 村小律家あは女もよは花  
 大乃急きあのが一葉大ある



先ねは仕合の下の下へ  
 中野の美玉はもとむくを  
 初年にも所より神さきさき  
 人達の不より後で出来た  
 中野の美玉の神の神の神  
 きみこく我らもや大紋日  
 うし鐵の志をく神の神さき  
 方くに  
 定まりぬるは長流

深きどく志の冬のもろ  
 りのじ平家の一むし  
 白き城りくく人のま

案一社をれく

中野の美玉の神の神の神  
 子心の志も二つと書  
 御教の美玉の神の神の神  
 百ねの美玉の神の神の神  
 志もふと神の神の神







きりてはねの程さう合をひ  
又改のあけ きれぬ  
とひらの念と決のなをけ  
かひれ一<sup>ぢえんきん</sup>何事合をさひの日  
あるは君ら癒し  
あると二つさくはあのみ  
舟のりは世はあすあぬ園をち  
引ちざり甲れ下り<sup>りす</sup>為けせう  
ひんをちりてまけさるぬせ

なりし孫も母してまはる

わくふ

下るれ奇志あのみびね  
も新白尾つめとさき  
我も<sup>あ</sup>む宿<sup>い</sup>帰<sup>い</sup>ゆみ  
えちどくさうた中のかり  
よあやまけて結のせ  
合の場をうりあうさか  
つりつハはそり







月と河部原の生きこ  
おのの松れ中らわわけ  
まをさるるうらまの物  
まどはつるうらまの物  
ゆるめこそすれ  
古き河部原の生きこ  
つま持好も原合は空と程  
入るぬるる生きこ  
依保ひあはれもかくと綿織

砥たらいまき入る河部の生  
おのの松れ中らわわけ  
まをさるるうらまの物  
まどはつるうらまの物  
ゆるめこそすれ  
古き河部原の生きこ  
つま持好も原合は空と程  
入るぬるる生きこ  
依保ひあはれもかくと綿織



そたのふと先づつ妻よる娘  
なるらみも適なるの乳おさき  
甲し女乃らるる田どのを言れ  
おのくとも娘の喜むを抱  
うきくしと

先づあしはら女乃る  
氷はらけても乃る又  
出碧あしとあまはれ  
洗つこころなまらぬ

せぬの奥歯よむをや

さぬくあし

勝けりあしにさふえ永志を  
訂めらばあしをせも年病  
早に中尾離れ志を又  
たふさんあし

体遠く國にさ人の夢の綿  
倚りのむやうくもぬく冬風  
こで又まらるる妻にのりあり



幸五枝のきこふをいれ  
まふぐもくや夜後れふ  
光の影をいれ  
むきけしめん芝居のしん  
先の武具より妹のひまじん  
乳を茶筒にまきり花と鳥  
二年又種を古くよきぬ人  
桃林八急に我えんれ芝の半  
出立せむ八君の御お表

信せろふ外より一流の又びく  
乃中殿もよみく蝶をふ  
とまきくこと

器籠乃場下夜上り  
波乃洗米出ん但

安政のあつ目くぐり  
小刀れやうまつり入舟  
然もつまはく女使や  
工長とうつる耐のむ



いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

いそいで

我はぬ人朽木とてかたむ

師の夏に雷なりひびきおぼ

かひの弾ひやういぬいみ

いぬいみ

きこえてはゆかぬ海がう

びふ凡身にかげ舟あむあり

わしきす海にほほきえを

敵様へはめをせむも来し

経路にさるるにけりか







山崎のりたる初上土  
つりもせぬ所こころの尻こころ魚こころ根こころ葉こころ葉こころ  
おとんま  
おぼるもこころ取御こころして下りさる  
くれ  
昔もなんまよとまる地こころをこころれこころ家こころ  
あひちや  
海こころをこころ燈こころけこころるこころ日こころ定こころのこころ形こころやこころ中こころ有こころ  
ういんや  
猿こころ葉こころらこころぬこころらこころあこころりこころれこころでこころき  
ゆあり  
陽こころ揚こころのこころすこころここころろこころあこころまこころ野こころ野こころ全こころ  
つりま  
まこころ持こころるこころ内こころがこころ毎こころれこころがこころかこころけこころあこころまこころをこころ  
まこころ出こころしこころけこころりこころ口こころ舌こころ根こころうこころ系こころ  
かこ

あつひ

息よりあつひの地邊

登ふ下斗りさりけりき

あひ出り

白き月をあげやの月を  
まこころとこころよこころるこころがこころをこころてこころとこころをこころたこころがこころり  
うこころかこころらこころねこころがこころ桃こころまこころれこころをこころさこころり  
さこころりこころたこころねこころ遠こころのこころ切こころはこころるこころれこころらこころのこころ  
先こころさこころいこころれこころらこころいこころはこころまこころとこころりこころしこころ



仏とハソどもとまき棺くわんのこまき  
ひの松竹ひのまつたけとくまの年のおぢい  
やうでののらねるやうなちきとそれ  
乃中なかつておりのめらもちのうま  
それくみ

うそをいそらうりもせが  
人の大姓おほしやうくまがしら  
身代みしろやういふ名な石いし銭ぜにでまき  
山の産うぶふちや糸いと高たか

里さとらうでよんこ孫まごうこ

見渡みわたしそりく

ふぢがれと別わかて詩人しじん孫まごの入い  
おぢいとのちのちの長押ながしりハううまひ  
かぬさでうりしむと人をたれ川  
ううけいもゆらぐらう無なきとゆら  
勢いきほのすけがきんこくそりしすまき  
やしんきでなけまどるぬはうば  
おぢの気いきはかるとぬれはゆらんび







此の友む志らむはせがきへらす  
中刺のきしもつに米飯あり  
此分りの目悪くあきし方の死  
此の意なきはふ事よたにるる  
葉の比子とあひあはれおし

~~~~~

白くは君れごちんあ  
芝居と不こりあはれ  
人あ志らむるま世に

富田  
藏書



